

品質マネジメントシステムからみた博物館展示に対する考察

北海道大学大学院 環境科学院
環境起学専攻 実践環境科学コース
片島 幹太

本研究は、持続可能な開発のための教育(ESD)の学びの環境として、博物館展示に注目した。博物館展示は、企画段階、実施段階(展示制作と公開)、終了後段階などに分けられた手順と展示評価からなり、全体を「展示開発」と呼ぶ(*e.g.*, 日本展示学会, 2010, Screven, 1990)。博物館展示の課題は、学芸員は一般に教育の知識が少なく、教育活動を行う上での効果や結果を十分に考えてはいない(布谷, 2012)ことや、展示評価による企画や設計の成功・不成功が、展示開発の担当者のノウハウや能力によると捉えられることがあり、日本ではまだ評価が定着していない(里見, 2014)ことなどがある。また、展示を含む博物館評価では、共通の手法や指針が必要(標準化が必要)とされている(日本博物館協会, 2009)。本研究では、国際標準化の視点、特に、品質マネジメントシステム(QMS)のISO9000, 9001の視点から、博物館の主要事業である展示をみることで、博物館展示の現状と問題を指摘する。

QMS で用いられている「リスクに基づく考え方及びPDCA サイクルを組み込んだプロセスアプローチ」の視点から、具体的な博物館展示について現地調査するのではなく、展示開発を解説した文献や事例紹介しているもの(手順・評価に関する文献 6 編および事例報告 50 編程度)を中心に調査した。博物館展示に関する文献は、学芸員や研究者等により、ノウハウや先行事例に基づいて書かれている。文献に記載がないことは、博物館展示の関係者が気づいていない可能性が高く、それらに基づく問題や視点は、数多くの博物館展示やその関係者への指摘になる。展示開発の手順は、多種多様な論文・文献があるため、それらの共通・差異を含めて QMS からみしてみる。展示評価は Screven(1976)から派生し体系化された、「事実上の標準」である 4 つの展示評価(村田, 2003)について、検討する。

QMS からみると、各段階で実施や評価することを最初に関係者で決めて共有しておくこと(展示開発というシステムの構築)が十分ではない。そのために、現在の博物館に対する評価が目標の達成度・顧客満足度に偏っており(日本博物館協会, 2009)、それらに関する PDCA サイクルの考え方が一方、自分たちがどのように実施したかに関する PDCA サイクルの考え方がない。また、関連事業(講演会等)の検討は、展示制作の際に行うことが推奨されている(川合, 2014)が、教育の知識が足りない(布谷, 2012)等により、行われることは少ない(木下・横山, 2012)。QMS の必須事項「プロセスの相互作用」と捉えると、展示開発と関連事業の連携が弱いことが分かる。

博物館展示では、QMS から見ると PDCA サイクルやプロセスの相互作用に対する考え方がある程度行われているものの抜けている部分があった。特に、最初にシステムを構築するという考え方が十分でないことがわかった。QMS と同様のものを持つ博物館は少ないことが、多くの事例報告等から判断できたが、より詳しく定量的にするためには、今後の調査を要する。